

事故を考える

工学的な事故解析から考える交通安全
「自転車のニアミスから学ぶ」
上山 勝氏（「交通安全教育」2016 年 9 月号）

はじめに

これは（一財）日本交通安全教育普及協会が発行している「交通安全教育」誌から内容を抜粋したものです。筆者は、NPO法人交通事故解析士認定協会理事長です。

挿図は、記事の写真をもとにSDA事務局が作成しました。

■ ニアミス事例

TAAMS（Traffic Accident Auto Memory System：交通事故自動記録装置）が記録した映像をもとに解説されているが、この文においては、上から見た図を用いて述べる。

● 状 況

片側 1 車線の道路の交差点（図 1）に仲間の 4 台の自転車が連なって差し掛かった。図の、向かって左から来た赤い乗用車は右折しようとしている。自転車側は赤信号、赤い乗用車側は青信号である。4 台の自転車のうち 3 台は停止したが、2 番目を走行していた自転車が、停止した先頭の自転車を追い越して交差点に進入した（図 2）。



図 1 交差点の状況



図 2 2 台目の自転車の進入状況

次頁の図を参照されたい。進入した自転車は、右折する赤い乗用車に追従する形をとっている。その直後に、けたたましい警報音を鳴らしながら、右から大型重機車が進入してきた（図 3）。TAAMS には音も記録されるそうである。そして、大型重機車がほとんど減速することなく左折を行ったことで、ニアミスが発生した（図 4）。



図3 ニアミス直前の状況



図4 ニアミス発生時の状況

● 注意点は何か？

飛び出した自転車は、なぜ飛び出したのであろうか？

2台目の自転車の乗員は、先頭車に並ぼうとしたが、赤い乗用車が大きく右折を始めたため、「図面の右方向からの接近車両は交差点に進入できない」と解釈した。また、この赤い乗用車の位置から考えて、後続の直進車は交差点に進入できないと考えた。そこで、ブレーキを緩め、一時停止することなくそのまま交差点に進入してしまった。

そのとき、突然、けたたましい警報音を鳴らしながら、大型重機車が交差点に進入してきた。「直進車」ではなく「左折車」が進入してきたのである。この自転車の乗員が非常に驚いたであろうことは、想像に難くない。

■ 安全対策と今後の課題

この事例から学ぶ教訓は次のとおりである。

- 何があっても信号が「赤」で交差点に進入してはならない。
- 咄嗟の先読みは、極めて危険である。
- 信号「青」を絶対的として走行して来る車両がある。
- 飛び出し自転車の乗員が経験したであろう「驚き」を共有する。

以上

(記述：村川、挿図：浅原)